

氏名（本籍）	かみ 神	お 尾	あき 昭	お 雄	（東京都）
学位の種類	文	学	博	士	
学位記番号	博	乙	第	356	号
学位授与年月日	昭	和	62	年	2月28日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	文芸・言語研究科				
学位論文題目	<b>PROXIMAL AND DISTAL INFORMATION : A THEORY OF  TERRITORY OF INFORMATION IN ENGLISH AND JAPANESE</b> （近情報と遠情報：英語および日本語における情報のなわ張りの理論）				
主査	筑波大学教授	ph. D.	中	右	実
副査	筑波大学教授		松	本	克己
副査	筑波大学教授		寺	村	秀夫
副査	筑波大学教授	文学博士	北	原	保雄

## 論 文 の 要 旨

本論文は、英語と日本語とを分析対象として、〈情報のなわ張りの理論〉を提唱するものである。まず第一に、〈情報のなわ張り〉という概念装置の必要性を論じ、第二に、話し手ないしは聞き手のなわ張り内の情報となわ張り外の情報との峻別の必要性を唱え、さらには、情報が話し手、聞き手、あるいは両者のなわ張りに属するか、それともいずれにも属しないか、を決定する要因を探り、そして第三に、そのように区別された情報と、それを伝達する文形式との間には、ある種の規則的な対応関係があることを明らかにし、加えて、日英語の間にみられる対応関係のずれに対しても原理的な説明を与えるものである。

まずはじめに、〈情報のなわ張り〉とはどういうことか、その概要を捉えるためには、とりあえず次の例で十分である。

- (1) a. John is linguist.  
b. ジョンは言語学者 だ / です。
- (2) a. I think / imagine / guess John is a linguist.  
John is a linguist, isn't he ?

ジョンは言語学者 だろう / でしょう / だって / らしい / みたいだ。

ジョンは言語学者 じゃない? / でしょう?

(1)と(2)の間には、情報の提示の仕方に違いがある。(1)の文は、日英語ともに、「ジョンが言語学者である」という情報を直接的かつ断定的に述べている。それに対し(2)の文は、(1)と同じ情報を多少とも間接的あるいは不確定的な形で述べている。この違いは、一見して明らかなように、言語表現の違いの中に映し出されている。それゆえ著者は、これらを区別して、(1)の文形式を〈直接形〉(direct form)と名づけ、(2)の文形式を〈間接形〉(indirect form)と名づける。

ここで問題となってくるのは、これら二つの文形式〈直接形〉と〈間接形〉の選択を決定する要因は何かということである。そしてそれが、話し手の側の単なる確実性あるいは断定性の有無によるのではなく、伝達される情報が話し手、聞き手、あるいはその両者にとって〈近い〉(close, proximal)情報であるか、それとも〈遠い〉(distant, distal)情報であるか、という相違によって決定される、と著者は仮定する。

この仮定に基づくなら、〈情報のなわ張り〉に関して、次のような四つの可能な組み合わせが予測され、さらには実際上も、それぞれの場合に対し一定の文形式が対応することが確認される。

(3)

		話 し 手	
		近	遠
聞き手	遠	A：直接形 (日英)	D：間接形 (日英)
	近	B：直接形 (英) 直接「ね」形 (日)	C：間接形 (英) 間接「ね」形 (日)

すなわち、Aは、与えられた文によって伝達される情報が話し手には近く、聞き手には遠い場合、Bはその情報が話し手にも聞き手にも近い場合、Cはその情報が話し手には遠く、聞き手には近い場合、そしてDは、その情報が話し手にも聞き手にも遠い場合である。これら四つの可能な場合がどのような文形式と対応するかを調べてみると、上述のとおり、日英語ともに、明確な規則性が見いだされる。しかし一方、とくに注目すべきことに、日英語で大きく食い違う点がある。英語では、〈直接形〉と〈間接形〉の対立だけで用が足せるのに、日本語ではその対立だけでは済まず、決定的な働きをするのが日本語に特有な終助詞「ね」であることが明らかである。

以上の枠組みのもとで、当然、重要になってくるのは、ある情報がどういう場合に話し手に近く、またどういう場合に聞き手に近いか、それをあらかじめ決定しておかなければならないことである。つまりは、〈情報のなわ張り〉を決定する要因は何か、という問いに対する答えが求められるが、著者のみるところ、その代表例として、次のような場合があるとする。

(4) a. 直接体験によって得られた情報は、その体験者本人に近い。

b. ある人の行動や個人的事実に関する情報は、その当人に近い。

c. ある人に身近な第三者に関する情報は、前者に近い。

d. ある人の専門領域に関する情報は、その当人に近い。

一般に、話し手ないし聞き手は自分に近い情報とそうでない情報とを区別し、自分に近い情報を、自分の〈情報のなわ張り〉に属するものとみなすのである。

以上はごく基本的な側面の概要を示すにすぎないが、そこに含まれる問題は次のような構成のもとに十分に綿密な分析が加えられる。本論文は八つの章からなり、第一章は、著者が基本的に準拠する機能的構文論の立場を概説し、第二章は、ある種の言語現象に則してこの理論的枠組みの妥当性を例証する。たとえば、英語の照応代名詞 *that* と *it* の用法には違いがある。話し手がある情報をすでに知っているかどうかが分岐点である。この〈情報の既知性〉という概念は、しかしながら、著者の提唱する〈情報の遠近性〉という概念と明確に区別されなければならないことが指摘される。次に第三章では、英語について、そして第四章では、日本語について、〈情報のなわ張りの理論〉の妥当性と有効性が論証される。第五章では、日本語の場合に決定的に重要な働きを担う終助詞「ね」の機能論的性質が分析される。第六章では、第三章と第四章で得られた成果を踏まえ、全体論的視野のもとで日英両語が比較対照され、その相違点がそれぞれの言語に特有な文使用の原則の相違に由来することが明らかにされる。

第七章では、いろいろな角度から、〈情報のなわ張りの理論〉の意味合いが求められる。服部四郎の研究を皮切りとして、日英語における指示代名詞 (*this, that*; 「こ・そ・あ」) の用法に関する研究は多いが、そこで明らかにされた事実もまた、このなわ張り理論によって自然な形で説明できることが確認される。さらには、指示代名詞の体系と、情報のなわ張りの標識となる文形式の体系とが、日英両語における幼児の言語発達の過程で、どのように習得されてゆくか、その理論的可能性に対してもまた考察が加えられる。最後に第八章では、関連する二つの理論、すなわち、久野暉による視点の理論と、赤塚紀子による認識と文形式との関連性に関する理論が、なわ張り理論とどのような関係にあるかが検討され、さらにまた、K. Lee による日本語の語彙意味論的成果がなわ張り理論にどのように符合するかが考察される。いずれの場合にも、ここで提唱されている〈情報の遠近性〉という視点こそが決定的に重要な役割を果たすことが明らかにされる。

## 審 査 の 要 旨

本論文の独自性は、なによりもまず、〈情報のなわ張り〉という概念装置を創設し、それを準拠枠として、少なくとも直観的には明確な、ある種の言語現象を統一的に記述し、かつ説明する理論を提唱したところにある。ここで〈情報のなわ張り〉とは、要するに、〈情報の遠近性〉にかかわるものなので、これがこれまでに広く唱えられてきた〈情報の既知性〉という概念とは明

らかに異質であり、それゆえに、この概念を準拠枠とするなわ張り理論がこれまでに類をみない独自の理論体系を構成していることは疑いを容れない。さらにまた、その経験的妥当性が日英両語にわたる言語現象に即して十分に実証されているということも異論の余地なく明らかである。かくして本論文は、その目標に十分見合った満足すべき成果を収めているばかりでなく、現在の言語学研究に実質的な貢献を果たしているということもまた高く評価される。

この種の研究領域は、その性質上、機能講文論 (functional syntax) あるいは広く語用論 (pragmatics) に属するものとみることができる。そのように言える理由は、言語表現と現実の場面的状況とがどのように対応するかが問題とされるからである。さらに言えば、言語表現によって伝達される情報が実際の場面との関連においてどのような性質をもつものとして規定されるか、ということが中心問題となるからである。〈情報のなわ張り〉という概念装置は、すでに明らかなように、〈話し手〉〈聞き手〉さらには〈近い〉〈遠い〉という二組の対概念によって定義される。これらの成分概念の性質からもよく推察されるとおり、〈情報のなわ張り〉という総称概念、およびこれに準拠する〈なわ張り理論〉は、すぐれて語用論的な性質のものである。これは著者も認めるところであり、たとえば(4)でみるように、〈情報のなわ張り〉を決定する要因が、話し手ないしは聞き手の言語外的知識および発話の場面的状況といった語用論的側面を含み込んでいるという事実によって確認される。

ここでとくに言うべきことは、もちろん、なわ張り理論が語用論的であるということ、そのこと自体にあるのではない。むしろ問題なのは、意味論と語用論とを明確に区別しないために、意味論を抜きにして、統語論と語用論との間に直接的な対応関係が求められている、という事実こそあると言わなければならない。たとえば、〈直接形〉〈間接形〉さらには終助詞「ね」について、それが実際に用いられる語用論的適切性の条件は、確かに明らかにされたとはいえ、それら表現形式の内在的性質そのものは、十分に掘り下げられたとは言えない。これを理論的立場の違いということで片付けてしまうことも、あるいは可能なことかもしれないが、著者の目標が暗黙のうちにも統一的な説明理論を構築するということにあるのであれば、その立場の是非を問わないわけにはゆかない。見通しとして言えば、意味論の語用論からの独立性を認め、語用論への意味論的基盤を解明することによって、統語論と語用論を結ぶ「架橋」(interface)として意味論を位置づけるということをするれば、理論は全体としてもっと明示的なものになるのではないか、という可能性がある。そしてその最大の利点は、ことばに内在的な不変的〈意味〉性質を、場面依存的で可変的な〈使用〉の側面から峻別し、それを明確に捉えることができるということにある。これは実際、方法論的には、格別の慎重さを要求されることとはいえ、その実行可能性について、疑いをさしはさむ余地はない。

なわ張り理論の健全な発展のために、いまひとつ、指摘しておくべきことは、その普遍的理論としての可能性である。本論文は分析の対象を英語と日本語に限定しているとはいえ、取り上げられている現象は十分に多様であり、その分析は十分に深いものである。それゆえ、この理論の

基本的骨格は十分に実証されているとあってまちがいない。そのうえでなお今後に残された課題を挙げるとすれば、一段と精緻に細部を詰めるという作業とは別に、この理論の普遍性を確認するために、日英両語以外の言語についても具体的適用を試みるという作業がある。これは著者自身も気づいているところであり、フランス語や韓国朝鮮語への適用可能性が示唆されている。改めて断るまでもなく、この作業はもちろん、本論文の守備範囲を超え、将来の研究に委ねられるべき性質のものである。この作業を通じて、ここで論証された基本的骨格が一段と強固なものとなり、理論全体が健全な発展を遂げることが大いに期待されるのである。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。